

氏 名	くろ いわ やす ひろ 黒 岩 康 博
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 412 号
学位授与の日付	平 成 20 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	文 学 研 究 科 歴 史 文 化 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	大衆社会の到来と「郷土」大和

論文調査委員 (主 査) 教 授 藤 井 讓 治 准教授 吉 川 真 司 准教授 高 木 博 志

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、戦間期、1920～30年代の奈良県における「郷土」表象の諸相を、奈良県師範学校の人脈を中心に据えて描き出したものである。

戦間期は、通常名望家社会から大衆社会への移行が開始された時期であると言われるが、その際指標として用いられるのは、商品の大量生産・消費や、マス・コミュニケーションの発達とそれに伴う複製文化の隆盛などである。しかし、こうした「大衆文化」は等しく日本全土を覆い尽くした訳ではなく、日露戦後の地方改良運動期に地方振興の意味もあって普及した「郷土」研究が、「地方文化ノ先導者」である小学校教員により、いまだ着実に続けられていた。大正4年(1915)、即位大礼後の大正天皇が神武天皇陵親謁のために訪れた奈良県においても、同年に刊行された『奈良県高市郡志料』は史蹟調査会・編纂委員会を設けて編集され、委員もほとんど全てが地元の小学校教員であった。2年後の大正6年に上梓された『奈良県宇陀郡史料』においても小学校教員が編纂委員を寡占し、その後も『奈良県宇智郡誌』(同13年)、『奈良県南葛城郡誌』(同15年)という成果が生み出されたが、これら「郷土」研究に人材を供給し続けたのは地元の奈良県師範学校であった。本論文では、このような奈良県師範学校を中心とするネットワークに注目し、観察者かつ採集者である地域の人々が、考古学・民俗学・国文学などの近代に成立した学問を用いて行った戦間期の「郷土」大和表象の諸相を明らかにする。

第一章「高田十郎『なら』に見る近代大和の「地域研究」ネットワーク」は、奈良県師範学校の国漢教員であった高田十郎を中心とする人的ネットワークを、高田が発行していた謄写版個人雑誌『なら』(大正9年8月～昭和8年10月)を素材に分析したもので、「観察者たり採集者たる」人々の見取り図のようなものと言える。高田は『なら』を舞台に主に民俗学研究と金石文研究を行うが、前者では『奈良県風俗誌』の編纂を担当した際に県師範卒業生とのネットワークが強固に形成され、同僚への聞き取りも盛んに行われた。また民家の藁屋根などの調査活動に目を留めた柳田国男の紹介により、佐々木喜善・本山桂川といった『爐邊叢書』の著者である各地の民俗学者とも交流が生まれ、高田自身も『爐邊叢書』の執筆者に加わることを望まれるほどであった。

もう一つの金石文研究の過程で生まれたのは、様々なコレクターとの交流である。先ず朝鮮鐘に関しては、その情熱を喚起した東京帝室博物館の高橋健自と京都帝国大学の考古学者梅原末治が挙げられる。殊に梅原に関しては、「朝鮮鐘発見ノ命」と崇める程で、高田の拓本コレクションは梅原の朝鮮半島における踏査がなければ存在し得なかった。次に小泉顕夫・保井芳太郎というコレクターとの交わりがあり、小泉は大正10年以降朝鮮半島にフィールドを移して朝鮮半島の金石情報をもたらし人物となる。それに対し保井は、終生大和にこだわり、寺院址から出土する古瓦を材料に『大和上代寺院志』(大正7年)を刊行し、大和史学会を主宰する。高田の春日大社の釣燈籠・石燈籠調査に際しては、後に『春日神社文書』他の同社関連史料編纂のほとんどに携わる欄宜の森口奈良吉の、『法隆寺現存金石年表』(昭和6年)の刊行に関しては同寺管主の佐伯定胤の助力が大きい。

第二章「「うまし国奈良」の形成と万葉地理研究」では、「万葉地理研究」というジャンルを拓いて、現在にまで繋がる奈

良＝「日本のふるさと」というノスタルジックなイメージを打ち立てた小学校教員辰巳利文を取り上げる。辰巳も高田同様、雑誌『奈良文化』を主宰し、そこで万葉地理研究の成果の啓蒙に努めた。辰巳が『奈良文化』誌上で確立した万葉地理研究は、歌の師である佐佐木信綱や東京帝国大学の久松潜一らに認められ、『大和万葉地理研究』（昭和2年）と『大和万葉古跡巡礼』（同5年）が生まれる。両書で辰巳は、近世の歌枕研究の集大成である『万葉集古義』の「名処考」を一刀両断し、文献ではなく実地踏査を重んじる研究を提唱する。ただ、小字名や故老の口伝などから万葉歌枕を比定するその手法は、必要以上に詳細な臆断にわたることも多く、辰巳に続く万葉地理研究者からは敬して遠ざけられた。

しかし、辰巳は次の段階として万葉歌枕の可視化、つまり『大和万葉古跡写真』の頒布へと進む。これは現在まで大量に出版され続けている「万葉図録」の淵源となるもので、山田孝雄・次田潤という万葉学の泰斗から激賞される。その画面には、著名な堂塔寺社や花木苑池は映っていないが、国定国語教科書により「アノニマスな農の風景」が国民の原風景として刷り込まれていた当時の社会では、そのような写真はかえってノスタルジアを惹き起こした。山部赤人や柿本人麻呂がどこかに映っているという感想からは、『古跡写真』が時間的週及をも可能にしていたことが分かる。

文献から写真へと進んだ辰巳の万葉地理研究は、最後に万葉歌枕の臨地指導を行う奈良文化夏季講座の開催へと至る。歌枕は、全国的に近代的名勝・旧蹟の価値観とのズレから荒廃を極めていたが、辰巳は先ず自ら万葉歌枕を個人的に臨地案内し、その保護に貢献する。そして、一人では歌枕巡歴希望者に対応できなくなった時に始められたのが夏季講座で、その講師陣には『奈良文化』に寄稿していた万葉学者を核に、考古学・歴史学の泰斗も顔を並べていた。参加者は地元奈良県が最多で、高等教育の拠点が存在する東京・京都・大阪からは学生の参加が多いのに対し、地元からは小学校教員の割合が高かった。これは当時隆盛していた郷土教育を教授する際、自ずから「郷土」を体験する必要が生じたためと思われる。

第三章「天平の苑—万葉植物園ができるまで—」は、第二章で言及した万葉植物園に焦点を当てた論である。現在奈良市春日大社の神苑となっている万葉植物園は、昭和7年（1932）に期待の観光名所として開園された。元々奈良公園内の奈良離宮建設予定地を有効利用するため、明治末年に林学者本多静六が娯楽施設としての植物園を構想して以来、植物園の設置は奈良県の長期的な課題であり、昭和2年に昭和大典の記念事業として「万葉植物園」という形での設置案が提起される。ところが、建国会館の設置など多額の費用を要する事業を他に抱える県は、その案には消極的な姿勢を見せた。そうした事態が変化したのは、万葉集関連文献の収集も行う「万葉博物館」の構想を持つ国文学者佐佐木信綱が、万葉植物園期成会を組織してからである。期成会の計画は、建設費は全て寄付により、設計は大阪の都市計画家大屋霊城が担当するのというものであった。郊外疎住都市である「花苑都市」の構想を日本に紹介した大屋は、庭園部分、特に池の造営にあたり、平安京の神泉苑と朝鮮慶州の鮑石亭址を参考にした。これは天平文化を代表する万葉集にちなんだ植物園の設計としては意外なことだが、両所で行われていた曲水宴に「万葉の面影」を見出した結果であった。植えられた植物も、万葉集に詠まれてはいるものの、実際には奈良時代の日本の庭園にはなかったものが数多く含まれていた。万葉植物園は、その看板とは異なり、天平時代の実態とかけ離れた点が多く、観光名所として人気を誇った期間はごく短かった。

第四章「蒐集家崎山卯左衛門の「郷土」」は、全国的に郷土教育運動が展開された1930年代に、赴任先の郷土室を校区からの蒐集物で満ち、濃密な「郷土」空間を作り上げた一人の小学校教員崎山卯左衛門を取り上げる。崎山は畝傍中学在学中に考古学に触れ、同じ高市郡内の真菅校という周囲に遺跡溢れる職場に赴任したことから、考古遺物の蒐集に乗り出す。そして拾い集められた石器・土器・古瓦などは同校へと運び込まれ、郷土室を形作っていく。そのコレクションには考古学者の森本六爾も注目し、森本が弥生文化を探索する際決め手となった稲の粃跡が残る土器をここでも発見している。崎山は森本の主宰する考古学研究会の大和支部も任されていた。

もう一つ崎山が収集していたのが土俗資料、つまり伝説・風習・童謡・民謡などである。伝説・風習に関しては、多くの土俗が抱え、柳田国男ら「正統」民俗学者が忌避したという性的要素から目を逸らさないのが特徴的である。明日香を含む高市郡には石の信仰物が沢山あるが、それらを陽石・陰石と明言して憚らない。それに対して童謡・民謡の方には、土俗研究者兼小学校教員という立場から、卑語を伏せ字にするなど幾分の教育的配慮が見られる。また真菅校の郷土教育は郷土室を拠点に行われ、そこは崎山と児童たちの実地踏査の結果集まった品で溢れていたが、これらが学校教育のカリキュラムで運用される時には、十分に活用されたとは言い難い。崎山とその生徒たちが従事した、その蒐集過程こそが郷土教育だったからである

論文審査の結果の要旨

大和（奈良）は、日本の国民国家形成において特別の意味をもってきた。従来、岡倉天心、和辻哲郎、保田与重郎ら東京・京都など中央の学者・知識人によって生み出されてきた大和表象や学知をめぐる研究はあっても、奈良の地域社会における郷土史家・古物家の活動や彼らによる「郷土」大和表象は顧みられることはなかった。また、維新时期から明治期を通じた奈良地域の文化財保護制度の研究や、明治期における歴史・美術史の編纂をめぐる学史の研究はあっても、第一次世界大戦と第二次世界大戦との戦間期の、大衆社会状況下の地域社会における郷土史家・知識人の活動やその学知は研究の対象とはなっていない。

こうした研究状況に対して論者は大衆社会状況下における、中央の学者・文化人と「観察者たり採集者たる」「土着の人々」との関係性やネットワークに着目する。また、大衆社会状況下の「郡史・村史・郷土史の編纂」に大きな役割を果たした小学校教員、その教員を供給し続ける奈良県師範学校を核として生み出される「うまし国奈良」「日本のふるさと」という戦間期の「郷土」表象を分析する。さらに大衆社会の複製メディアの問題として、中央で発行された学術雑誌だけでなく、中央から発信される学知を受容しつつ奈良県の地域の担い手によって発刊された雑誌『なら』『奈良文化』『大和志』などの同人誌を、分析の中心に据えた。そして畝傍高校・真菅小学校所蔵の郷土誌関係史料、春日神社の万葉植物園関係史料、奈良女子大学所蔵の「古跡写真」などの地域社会の側の史料群も発掘している。いわば中央から地域社会に至る、学知の重層的な構造を問題にするのである。

論者が明らかにした第一は、奈良県立師範学校国漢教員高田十郎の謄写版個人雑誌『なら』（大正9年8月～昭和8年10月）の民俗研究、金石文研究にあらわれた、師範学校を磁場とした人・「もの」のネットワークのありようである。また「考証的総括的ヲ尊バズ」とする高田の方法論や、アカデミズムの「博士」とわたりあった近代大和の「物の世界」を提示する。そこでは従来のように、明治期に欧米から移入された文化財行政や学知に社会が覆い尽くされたイメージではなく、1920～30年代においても近世以来の「古物」・骨董の世界が広く社会に残っていたことを明らかにする。それとともに、奈良県で発行される同人誌の役割を大衆社会状況下のメディア状況に定置している。

第二に、奈良には「建国の聖地大和」、「うまし国奈良」の二側面があるが、その後者の「うまし国奈良」イメージ、奈良県＝「日本のふるさと」意識を生み出した起源としての奈良の小学校教員であった辰巳利文の万葉歴史地理研究を位置づける。論者は、万葉歌枕の比定の歴史を追うとともに、辰巳利文による雑誌『奈良文化』を媒介とした活動を明らかにした。文献研究・実地踏査・口碑流伝の採集（古老の語りなど）が一体となった辰巳の方法論はアカデミズムには受け入れられなかったが、アノニマスな風景への志向をもって万葉歌枕の可視化をはかる『大和万葉古跡写真』は学界にも影響を与え、また後世の『万葉図録』の先駆けとなったことを論じる。さらに、辰巳は万葉歌枕巡歴の案内人をつとめ、昭和2年（1927）から8年にかけてはそれを奈良文化夏季講座として組織的な運動へと発展させたこと、またこの「実地踏査」という方法が国文学・歴史学に大きな影響を与えたことを指摘する。論者が、アノニマスな風景写真という大衆社会状況下の新しいメディアと、国文学という学知との交差を論じた点は斬新である。

第三に、論者は、明治期の離宮設置計画の頓挫をへて本多静六が示した植物園構想に奈良公園の「万葉植物園」の端緒を見いだし、それが昭和大典事業の一環として内務省神社局技師角南（すなみ）隆、県技師岸熊吉、春日社宮司二条基弘、榎宜森口奈良吉らや、万葉学者佐々木信綱の活動によって、昭和7年に設置されたことを明らかにする。そして、「万葉植物園」のデザインは、「緑の都市計画家」大屋霊城の「平城平安の造園手法」にもとづき、神泉苑の池、慶州の鮑石亭址石渠を参酌してできたものであるが、天平の庭の実態とはかけ離れたものとなっていたとする。

第四に、大正15（1926）年3月～昭和12年12月に、真菅小学校に勤めた崎山卯左衛門の村内遺跡の研究と遺物蒐集の活動、森本六爾への資料提供、大和考古学会を通じた交流の諸相を明らかにする。崎山の土俗研究は、出身校である奈良県師範学校教員高田十郎の薫陶を受けたもので、年中行事・俗信・風習・口碑などを研究対象とし、性へのまなざしも堅持したことを、論者は指摘する。また崎山が民謡・童謡を蒐集し雑誌『童心』を発行するとともに、児童にも遺物を採集させ、真菅校郷土室を郷土教育に活用したことを明らかにする。

このように本論文は、奈良県師範学校を核とする、地域社会の「観察者たり採集者たる」高田十郎・辰巳利文・崎山卯左

衛門という三人の人々が「郷土」としての大和を如何に認識し、表現したか、を解明したものである。奈良という地域社会に密着し、そのなかで多くの公刊・未公刊史料を博搜して本論文は著されたものであり、その実証レベルは高く、評価すべきものである。

ただ各論が示す豊かな世界に比して、総論に弱さが見られ、たとえば「うまし国奈良」の大和表象で論文全体を十分には説明できていない点、「大衆社会」の規定がなお曖昧である点、地域の学知が「国文学」に偏っている点、などが課題として残されている。しかし、こうした点は、本論文の価値を著しく損なうものではなく、むしろ論者の今後の研究に期待すべきところである。

以上、審査したところにより、本論文は博士の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2007年10月22日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。